

證空は法然の教旨（『登山状』『一紙小消息』）を継承して、『女院御書』に次のように述べている。

「しかるに今うけがたき人身をうけ、逢がたき觀經の教により仏の願力をきゝたてまつれば、善惡の凡夫ひとしく煩惱の胸のうちに歡喜の心おこりて、信心のあまり命を阿弥陀仏にたてまつるなり。」

ここに證空は人間の存在は「受け難き身」であると理解している。その前提として六道輪廻が考えられる。證空にみる人間の理解を明らかにするために現実の人間像について述べている内容を窺いたい。まず六道輪廻についての證空の理解から尋ねてみたい。

「煩惱ヲ起シテ三界六道ノ業ヲ作りテ、六趣四生ニ輪廻スル」

煩惱をもって三界・六道の業因として無始より以来、六道を輪廻しているという。證空はこの世に人間の生を受けても仏法との出会いが得られ難いことを次のように述べている。

「生死ノ間ニ、タマタマ人身ヲ受ケテ、法ニ逢フ事又希ナリ。タマタマ逢フト雖モ、唯行門ニ嗜ミテ、弘願ノ正門ニ入ラザレバ、出離ノ増上縁ナシ」

人間が六道を輪廻しているのは浄土の教えに逢わず本願力を信じていないからであるという。さらに受けた人身は無常であることを述べている。人間は現世で生老病死の四苦を初めさまざま苦を受ける。これは避けられないのである。

つまり四苦を受けて心労を廻らすのは現世に心奪われている。今、浄土の教えに出会って信心が確立すれば臨終して直ちに浄土往生が成就することを疑わない。ここに現世と来世にわたり苦に煩わされない。とにかく浄土の信心を確立することが肝要であると示している。

人間の生きる現世の相は末法・惡世である。現世の相は時降り機衰えて修行するものがない現実である。また證空は六道を輪廻転生する間の造罪に関して慚愧なく重ねていて愚かなことであるという。

さらに證空の果報觀について尋ねてみたい。證空は三界における受苦についての様相を対比している。六道輪廻で人間界における果報は八苦・五苦・三苦がある。とりわけ老苦と死苦が厭離の最たるものである。三惡道での苦は極苦であり人間界で受ける苦と対比できない程であるという。ここに現世における業因について指向されているのであろう。そして六道のなかで三惡道は惡業の果報、諸天は白善の果報、人間の果報は善惡が交雜するのを感じる世界である。だから一向の善でもなく、純惡でもないという。

人間の身を受ける本意は仏法との出会いにあると述べている。さらに證空は輪廻転生から解脱できる内容を次のように示している。

「我等久シク六道ニ輪廻シテ、苦云フベカラズ、今世尊ノ恩徳ニ依リテ、生死ヲ離レ道ヲ得タリ」

この様に六道を輪廻している者は釈尊の經説に出逢い、仏の恩徳を受けて出離することが出来るのである。

殊に阿弥陀仏と諸仏との滅罪についての対比については注目すべきである。衆生が無始より以来、六道に輪廻してその間に無量の罪障を重ねている。念仏（阿弥陀仏）の滅罪の利益が無ければ往生は成就できない。念仏には滅罪の利益があるのである。證空は滅罪については「滅罪ハ懺悔ノ力ナリ」と述べている。滅罪は懺悔によってこそ得られる。

続いて證空の出離解脱觀について窺っておきたい。證空は『五段鈔』に次のように述べている。

「善惡共に輪廻の業にて、往生の益を得ざる故に、出離の縁あること無し」

いわゆる凡夫は善惡ともに輪廻の業因を重ねているから往生の利益が得られず、出離の縁さえもないという。仏法との出会いの中でとりわけ浄土教との出会いが肝要となる。衆生が六道から出離解脱できるのは阿弥陀仏の

本願力によるということを明らかにしている。また證空は解脱の要旨について次のように述べている。

「解脱、といは、出離の異名なり。今生は觀門の功に依りて他力往生の謂を得たり。是則ち、此世の解脱なり。来世は弘願に乗じて浄土に生ずべし。是則ち、後世の解脱なり。」

つまり解脱は出離のことであり、解脱については現世の解脱と来世の解脱があるとす。現世の解脱は積尊の『觀無量寿經』の教旨により得られる解脱である。これは現世での念仏信仰の確立のうえに得られる。来世の解脱は阿彌陀仏の本願力により得られる解脱である。これは他力の救済に全てを任せるうえに必ず得られる。

ここに人間として生まれた者が生老病死の四苦を受けるのである。だが息絶え眼閉じれば阿彌陀仏の本願力により必ず極楽浄土に往生させていたたくという信心を得れば苦を超越できることになる。人間の生存を受けた者が避け難い四苦からの解放について知られる。浄土教における衆生の救済が明かされている。

今回の共通テーマからの證空にみる人間の理解においては他に機教相応、仏凡相応、本願（弘願）相応、正因の上の正行の教旨が関連することになる。

キーワード 證空 人間 浄土